

「永訣の朝」論のためのラフ・スケッチ

長谷川 達哉

これは昨年度の数字だが、宮沢賢治「永訣の朝」を高等学校の国語の教材として採用している教科書会社は十社、教科書の数は二十四種で、「永訣の朝」は定番教材の一つと言った感がある。この場与えられたのを機に、この詩について思うところを書いてみたい。

まず、「わたくし」の「いま・ここ」について考えてみよう。この詩を語り始める「わたくし」は妹の枕元に付き添っていて、妹の「あめゆじゆとちてけんじや」という言葉を聞き、「わたくし」は12行目で「くらいみぞれのなかに飛びだした」とする読み方がある。はたしてそうだろうか。初めにいくつかの問題点を指摘しよう。

四回繰り返される「(あめゆじゆ……)」の

一つ目(あるいは最初の二つ)が病床にある妹の口から実際に発話されたもので、他が「わたくし」の心中で反芻されたものだとするのなら、その表記(括弧の使い方など)に違いがないのはどうか。4行目(あるいは7行目)にある妹の言葉を聞いて、「わたくし」が駆け出したとするなら、では5〜6行目の描写はどのように考えるべきなのか。「まがつたてつぼうだまのやうに」駆けている人間の目を通した描写とは思えない。しかし、「わたくし」が「とぎされた病室の／＼くらいびやうぶやかやのなかに」いる妹の枕元に付き添っているとするなら、雲の様子を捉え、みぞれを「ふつてくる」と表現することは出来ないのではないか。「びちよびちよ」から

は、みぞれを直に感じている「わたくし」の姿が想起されるだろう。また、9行目の「これら」や12行目の「この」というダイクテイックな語に注目するなら、8〜12行目を語ろうとする「わたくし」は、既にその手に「ふたつのかけた陶碗」を持ち、「くらいみぞれ」の空を見上げていなければならない。

以上のような点から、例えば平尾隆弘や杉浦静が指摘したように、「わたくし」はこの詩を語り始める前に既に妹の言葉を聞いて家の外に飛び出し、そしてみぞれの降りしきる中に立っていると考えるべきなのである。出来事は時間の流れにしたがって継起するが、物語は必ずしも時間的に順を追って出来事を語るわけではない。「わたくし」の「いま・

「ここ」は、詩の冒頭部分から既に「このくらいみぞれのなか」にあった。では、その「わたくし」が語る言葉をたどってみよう。

「けふのうちに／とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ／みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ。「おもて」に「わたくし」は、病室の中の妹に語りかけるように外の様子を報告する。続く「あめゆじゆとてちてけんじや」は、「わたくし」の心の中に飢する妹の言葉である。この言葉は妹の肉声であった。今「わたくし」の心に響いているのは、妹が発した通りの方言でなければならぬ。「あめゆきとつてきてください」という標準語に翻訳したならば、意味は残っても、妹の息づかいや声の調子・抑揚などの生々しさは失われてしまうだろう。妹が語った言葉であるという、そのかけがえのなさを慈しむように、大切に守るかのように、この詩は妹の言葉を抱きとめていた。しかし、39行目の「Ora Orade Shitori egumo」は「わたくし」の心を引き裂くような恐るべき言葉であり、了解不能な意味を抱えた、不気味な黒い亀裂であった。ローマ字で表記されたまた四字落としとならない理由である。

妹が頼んだ「あめゆじゆ」は空から降って

くる。ここで「わたくし」は「あめゆじゆ」がやって来る空を見上げる。「うすあかくいづさう陰惨な雲から／みぞれはびちよびちよふつてくる」。雪の積った庭の「へんにあかるい」様子と、みぞれの降ってくる空の「陰惨な」「暗い雲」。この日の「わたくし」は、妹との別れを受け止め、「まつすぐにすすんでいく」ことを決意しながらも、同時に、妹と離れ離れになることに身を引き裂かれるような痛みを感じ、いつまでも一緒であるべき妹から突き付けられた「Ora Orade……」という言葉に耐えかねて、心は千々に乱れるのだ。二つの相反する思い、相反する色調が、この詩の中には流れている。「あめゆじゆ……」という妹の言葉は「ふたわん」とは告げていない。しかし、「わたくし」にとつては「ふたわん」であった。「ふたつのかけた陶碗」は何時も一緒だったのであり、「わたくし」にとつて、「いもうとの／さいごのたべもの」は二つの茶碗に盛られ、その二つの茶碗は一緒に並べられるべきものなのである。「青い蕪菜のもやうのついた／これらふたつのかけた陶碗に／おまへがたべるあめゆきをとらうとして／わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに／このくらいみぞれのなかに飛

びだした。「わたくし」は自分が「いま・ここ」にいるわけを確かめるかのように、つい先程の行動を振り返っている、—みぞれの降る中に立って、手には二つの茶碗を持ち、「くらいみぞれ」の空を見上げながら。そして、その想いから覚めると、空を見上げる「わたくし」の眼前には暗い雲があり、みぞれは降り続けている。この時、「わたくし」は妹の言葉の本当の意味にたどり着いていた。「ああとし子／死ぬといふいまごろになつて／わたくしをいつしやうあかるくするため／／こなさつぱりした雪のひとわんを／おまへはわたくしにたのんだのだ」。

右の認識を手に入れた「わたくし」は妹に感謝し、妹の想いに応えるように生きていくことを決意する。「ありがたうわたくしのけなげないもうとよ／わたくしもまつすぐにすんでいくから」。そして、妹が「はげしいはげしい熱」に苦しみなながらも、「わたくし」のために「あめゆじゆ……」と依頼してくれたことを思うと、胸はいっぱいになり、「わたくし」は言葉につまってしまうのだ。それが、27・28行目の「……／……」なのである。中途半端になってしまった。いつか稿を改めて、この詩を論じてみたい。(96年11月)